

# 月報

<448号>

ケルンボン日本語  
キリスト教会  
二〇二〇年五月二日発行

## 「平和 将来 希望」

エシミヤ書一九章一〇〜一四節  
佐々木良子

あとどれ位の時を過ごしたら明るい兆しを見せ  
て頂けるのでしょうか。どれほど経ったら、不安と  
恐れを取り除けられるのでしょうか。瞬間に、数  
えきれない尊い命を奪っている、新型コロナウイル  
スという得体の知れない力に今、世界中の人々が翻  
弄されています。

これまでの日常が非日常となり、人々は自分の内  
なる声に耳を傾け、様々なことを思い巡らしてい  
るのではないだろうか。同時にこの状況だからこそ  
主なる神が私たちにこれまで見出すことができな  
かった知恵やお恵みを与えてくださったこと、  
を、実感している方も多くおられると思います。

このような状況下、信仰者といえども皆、弱者  
です。躓き、疑うこともあり。しかし、何があ  
ろうとも、「・・・わたしは世の終わりまで、いつ  
もあなたがたと共にいる。」(マタイによる福音書  
二八章二〇節)と、復活された主イエスが、私たち  
に約束してくださった御言葉を思い起こしながら、  
生かされている今日という日を、乗り越えて参りた  
いです。

「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよ  
く心に留めている」と主は言われる。それは平和の  
計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を  
与えるものである。「(一一節)

一〇・一一節には「主は言われる」とあり、  
預言者(神から託された御言葉を伝える役割をする  
人)エシミヤはイスラエルの民に神からの希望のメ  
ッセージを伝え、立ち上がってほしい、と切に願っ  
ています。

エシミヤを通してこの言葉が伝えられたのは、今  
から二千年以上前のことです。この時、イスラエル

の人々は不信仰のためにバビロン王国によって国  
を滅ぼされ、多くの人が捕虜になり、一〇〇〇キ  
ロも離れたバビロンの国に移住させられてしまし  
た。この出来事は、いわゆるバビロン捕囚と呼ばれ  
ています。

イスラエルの民は、遠い慣れない外国の地で捕虜  
としての生活を強いられるようになりました。信仰  
の基としていたエルサレム神殿から引き離され、神  
からも見捨てられた、と絶望のどん底にいたのだ  
そのように、どこにも希望を見出すことができない  
イスラエルの民に向かって、エシミヤは神からの希  
望の御言葉を伝え続けるのです。

「主はこう言われる。バビロンに七〇年の時が満  
ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは  
恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻  
す。」(一一〇節)

バビロン捕囚期間は、七〇年であると神は仰せに  
なりました。この七〇年というのは文字通りの数で  
はなく、神の定めた長さを示しています。神は私た  
ちがいつまでも苦しんでいるままにはしておかず、  
その時を縮めて下さることもできます。実際、イス  
ラエルの人々は七〇年を五八年に縮めて頂き、故国  
に帰還することができ、イスラエル国家を再建しま  
した。

目の前の状況が最悪にみえたとしても、八方塞が  
りと思えても、永遠には続きません。神は平和と共  
に将来への道を開き、生きて行く希望の力を与えて  
下さるお方です。天地を創造された神は、大きな計  
画をもって私たちを導いておられます。それは災い  
を与えようという計画ではなく、平和を与え、将来  
の道を開き、希望をもって神に従う祝福の道です。  
二〇〇〇年以上経った今も世界中の人々が正に求  
めている「平和と、将来、希望」です。

但し、何もせずに棚から牡丹餅は降ってきません  
条件付きです。「そのとき、あなたたちがわたしを  
呼び、来てわたしに祈り求めぬなら、わたしは聞く。  
わたしを尋ね求めぬならは見いださず、心を固くして  
わたしを求めぬなら、わたしに出会わぬことである。」  
(一一一・一四節)主は祈りを聞いて下さると言われ  
ます。また主を尋ねる者の願いに答えて下さり、繁  
栄を回復するといふ言葉(祝福)を下されることを約  
束しておられます。

祈りとは、神に顔を向ける行為です。神に顔を向  
ける者に対して、神は必ず受け入れ応えてくださ  
います。それは、只一度ではなく、継続すること  
です。神の前に立ち続けることです。難しいこと  
い、思いがちですが、「夜明けは近づいている、し  
かしまだ夜なのだ。どうしても尋ねたいならば、尋  
ねよ。もう一度来るがよい。」(イザヤ書二一章一  
二節)と、神はその都度応えてくださいますから、  
親の元に身を寄せたい思いで、立ち続けていき  
たいものです。

困難な今、私たちは心を強くして乗り切ること  
ができるでしょうか。日々、飛び交うニュースや情  
報が錯綜している状況の中で、何事にも揺るがな  
い心を保つことができるでしょうか。それは不可  
能なことです。故に私たちは神の名を呼び、神の前  
に立ち続けることのみ、希望が与えられるので  
す。

私たちの目から見て最悪の時代と思える時でも、  
その状況をも用いて、神は御業を進められます。新  
しくされた将来に生きるに相応しい者としての必  
要な準備期間の中に置かれている私たちです。草  
花は穏やかな晴天の時だけ育つではありません。  
暴風雨の中を通して逞しく育つてゆくの

バビロンに連れて行かれたイスラエルの民の如  
く、私たちが心の拠り所としていた教会にも集う  
ことができず、将来も見えない状況に置かれてい  
ます。しかし、エシミヤが語ったように、「神の時  
が満ちたら、神は平和と希望、将来の恵みの約束を  
果たす」と、神は言っておられる」と、希望を伝え  
る預言者の役割が、この時、信仰者に与えられて  
いるように思います。

聖書は全部で六六巻により完成されていますが、  
使徒言行録だけは未完成とされています。そこ  
に私たちの信仰の歴史が書き足されていくので  
す。「泣きながら夜を過ごす人にも、喜びの歌と共に  
朝を迎えさせてくださる。」(詩篇二〇編五節)と、  
ダビデが賛美したように、希望をもって朝を迎え  
させてくださる神をお証しする者としてでし  
ょうか・・・

― 集会特集 ―

《ケルン集會》 家庭集會に参加してはや三〇年以上

ウィラム 初絵

ケルン日本語教室で知り合ったシムミット亜弥子さんに「日本人教会の家庭集會で聖書の話聞きませんか」と誘われたのは、もう三十年以上の前のことです。私自身は信徒の家庭で育ったのですが、ドイツ人の夫がプロテスタントで、教会で結婚式を挙げ子供たちも洗礼式を受けており、日本でミッシェン系の学校に行っており、自宅も近かったこともあり、「ドイツで生活していくには聖書のことを知っているのは悪くはないな」という不謹慎な軽い気持ちで参加をしました。

私の実家は典型的な浄土真宗の家族で、御座敷には大きな仏壇があり、事あるごとに祖母や両親が「帰命無量寿如来」とお経をあげていました。菩提寺の檀家総代をしており、檀家寄り合いがよく行われており、休日には祖母とお寺にお説教を聞きに行っていました。しかし両親は熱心な信徒ではなく、戦後の民主教育に戸惑っており、新しい教育は良く分からないからと、私をミッシェン系の学校に送りました。北ドイツ出身の夫はオーストリアのザルツブルクで育ちました。ザルツブルクはカトリックの牙城で、領主はザルツブルク大司教です。そんなザルツブルクにひっそりとプロテスタント教会があり、プロテスタント信徒にはこじんまりとした親密な教会があり、夫が堅信式を受けた牧師の元で結婚式、子供たちの洗礼式を挙げました。その教会との関係も牧師の引退や引っ越しなどで、自然消滅しました。夫はキリスト教に関しては懐疑的で、仏教にも深い興味を示し、日本ではよくお寺巡りをしています。

月に一度シムミット宅で行われる家庭集會での話は大変興味深いもので、ある年はヨーロッパ絵画の見方の話がありました。印象派の画家ミレーの絵は、慎ましい堅実な農民の生活を描いていると思っていました。しかし「落穂拾い」は、落穂を拾うような貧しい農民の生活を描いているのではなく、旧約聖書のレビ記に記された律法を描いていると聞き、大変驚きました。岩波文庫のマークの「種をまく人」は知識の種をまくのではなく、信仰の種を撒いていると聞き、又驚きました。キリスト教の社会では、生活があつて信仰があるのではなく、生活そのものが信仰のよつて、

絵画自体も信仰のようです。ある年は聖書の中の女性達の話でした。有名なイブやマリヤやマグダラのマリヤだけではなく、旧約聖書エステルやサラ、新約聖書のサロメやマルタなど多くの女性が聖書の中に描かれています。聖書の中の女性達は実に自由に生きており、日本で受けた「ひたすら自分を殺し良妻賢母となる」教育とは異なる生き方をしています。マグダラのマリヤの絵画のアトリビュートが油壺と髑髏と真珠というのも納得がいきました。ある年は寓話の話でした。聖書の言葉は中はパラドックスが多く非信徒には判りにくいのですが、それを易しく説明してくれました。アンドレ・ジイドの「狭き門」は聖書の言葉から来ている、ドストエフスキーの「貧しき人々」は聖書に「貧しき人は幸いである」に由来している等、目から鱗が連続して落ちていました。

この数年は佐々木牧師の元で渡辺和子氏の本を輪読しています。私達は回りに生かされている、生きていく事自体が感謝など読んでいると、私自身も優しい気持ちとなります。家に帰り夫に優しくしていること、夫が「アツ、亜弥子宅に行つたな。亜弥子さんに感謝しなくては」と呟いています。

家庭集會では知的好奇心を満足されるだけではありません。シムミットさんが提供してくれる和やかな雰囲気の中で、日本人女性が言いたい事を自由に言い、最後には美味しい日本食を食べる、精神的にも胃袋的にも満たされる時間です。ケルン日本語教室の幼稚部でお遊戯をしていた子供達も、成人し結婚し孫も生まれました。時間は恐ろしいほど早く経っていきましそんな中でキリスト教徒ではない私も受け入れてくれる家庭集會のような日本人女性の拠り所があるのは、有り難い事です。

《メーアブッシュ家庭集會》

藤井 弘子

我が家で集會が持たれるようになったのは南吉衛牧師(一九九三年)の頃である。月に二回金曜夜二〇時から。日曜日の礼拝出席が難しいデュッセルドルフとその周辺の日本女性と未信者のお連れ合いの参加を目指して始められた。今日に至るまで一番恵まれたのは私たちだったのではないか。周囲に日本人が殆どおらず、ケルンの日本語教会に出席するのが実家に帰るような感じであり、家庭集會はケルンから牧師夫妻を迎え、あちこちから常連の方々が車で来て下さる嬉しい集いであった。プログラムは、祈り、賛美、聖書

輪読、解き明かし、自由トーク、主の祈りで約一時間、その後遅い夕食を頂いて、時には一、二時ごろまで歓談するという形が長く続いていた。最近の集會は月一回第二土曜日一四時三〇分〜一七時。

子供の住む地に転居した方、孫の世話で遠路をヒストン往復する方、等々。状況は常に変化しているが、若い参加希望の方が与えられているので、参加メンバーの事情に合った型を模索している。毎回佐々木良子牧師の熱い祈りを感じ、緊張するが聖書のメッセージである、イエスキリストの「生涯、真実の愛、人を生かすための愛を体現された」ご自身を私たちに与えられたことを知って頂きたい、この聖書に触れて頂きたい、と切に願っている。免許返上で参加の難くなった姉妹が、自宅で家庭集會を始められたのは大きな希望だ。

科学技術が世の問題の全てを解決するかのように思われ、勝手に勘違いしていた今、コロナという目に見えない微細な生き物に一拳に支配されてしまった。この時を『ゆっくり考える』時として与えられたと受け取って、『極力外出を避けるように。』『三人以上の集合禁止。』との指示の中、小鳥や近所の子どもたちの声を聴きながら草取りをしよう。次の家庭集會に皆さんと集えることを楽しみにして。主に在って平安を！

《ミュールハイム集會》

永洞 久美子

去年からミュールハイムの外間さん宅で開かれている聖書会に参加させていただいている。私自身はキリスト教徒ではないが、中学から大学までキリスト教系の学校に通っていた。毎朝の礼拝や宗教の授業で『聖書』を読む機会が多くあり、宗教的観点からだけでなく多方面から聖書を読むこともしてきた。人生の一番多感な時期をこのように過ごしてきたことから、私という人格、品格の形成に聖書は大きく関わってきた。卒業してから長い月日が経ち学生時代のように毎日聖書に触れることはなくなっている。しかし、この聖書会が改めて自分と向き合うきっかけを作ってくれている。

キリスト教の聖典とされている聖書の中には旧約から新約まで様々な物語が書かれているが、その内容は神の慈悲や人間の美しさについてのみ書かれているわけではない。むしろ下口とした愛憎劇、あ

りとあらゆる人間の醜さ、啓示を受けても罪をくり返してしまふ愚かさなどの大集約となっている。つまりどこをとってても人間の弱さを突き付けられるような内容なのだ。こう書いていくと救いの書というよりは絶望の書と言ってしまうようになる。しかし、聖書を読み込んでいくと、やはり聖書が聖書たる所以なことが分かる。様々な物語の主人公たちとその周囲の人物が起す悲喜劇は非常にドラマティックに展開し強い印象を残していく。一方いわゆる民衆と一括りにされるような背景的人物たちの姿はどの時代であっても堅実にその時代を生きようとしているように思われる。私はここに人間の可変と不変の姿を見ることができると思う。可変とは良くも悪くも人間は変わることができるという希望であり、不変とは人間の根底に流れている人間本来が持っているもつとも素朴なあるべき姿なのではないだろうか。

実際、私は聖書会に参加することで毎回自分の中の不変と可変について考えさせられる。例えば日常生活で嫌なことがあつてついつい他人への思いやりの心を忘れる。これは悪い方への可変。しかし、その自己中心的考えを省み自分のできることから改善してみよう。これは良い方への可変。そしてそんな自分を支えてくれる家族、友人、自然など周囲の存在。これは不変。不変なものがあるからこそ、自分の可変を信じられるのだと思う。変わることでできるのだという希望を得、不変的に愛を注がれていることへの感謝を呼び覚ます。聖書会には私にとっての生きる活力を与えられる場所である。このような機会、場所を得ることができたことを本当に感謝する。

《聖書の学び》

ツヨミミット 亜弥子

三ヶ月で月に二回、第一・三水曜日の午前には佐々木牧師宅で、私達はいわゆる聖研をしています。集まる人は皆、先生の自宅から徒歩で二〇分位の所に住んでいます。現在、使徒言行録のところを学んでいます。教会員ではない方が来られる時はその都度教会暦に合わせた箇所を読んだりしています。

新しい方と交わるのは新鮮さがあり、基本的な質問からも学ばされる事が多いです。この秋には先生とその新しい方も一〇年毎に開催されるオーバーアマガウの受難劇に行く事になっていて、受難節に近い二月末の会ではたっぷり受難週の箇所を再確認しました。同じ所を読んで、その都度違う事に気付か

れことがあるのが聖書です。各自が持っている聖書で輪読するので、その訳し方について話しあうこともあります。

一回程ボン大学で神学を学んで居られる方も参加された事があります。その時は彼から未だ議論されている神学方面からの話を興味を持って聞く事もありましたが、そういうのは神学者に任せておこうと私は思いました。二時間しっかりと時間があるので、私達は自由に質問、発言が出来るのは感謝です。

《ママの子育て学び》

高野 亜希子

私は昨年四月に主人の仕事の都合でケルンに来ました。とても元気な男の子が二人います。日本にいた時から主人の仕事は忙しく、年の約半分は出張で不在という生活をしていました。そうなるも当然家事や育児も全て一人でやらざるを得ないので、とにかく子供たちと一緒に過ごすことで日々いっばいでした。日本にいる時からそんな生活でしたので予想はしていませんが、ドイツに来てからはより一層大変でした。

ドイツ語の知識は全くない、土地動もないうえ走り回る二人を連れていくと買い物一つですら厳しいものでした。そして、ドイツの幼稚園待機問題が深刻で、すぐに幼稚園に入れることが難しく、問い合わせをしても門前払いや、ドイツ語しか通じなく途方に暮れていました。そんな生活をしていて思っていたことは、私はなぜ試験ばかり与えられるのだろう。こんな中で家族も自分も本当に幸せになることができるのか、ということでした。

そんなときに出会ったのが、この子育て学びの会です。こちらに来て色々お世話になった知人から聞いて子供二人を連れて参加したのがきっかけでした。佐々木先生をはじめ参加されていた方々は、皆私の話や育児の悩みをよく聞いてくださり、色々アドバイスをいただけて、とても温かい場所であると感じました。聖書の言葉を参照しながら読み進め、自分の育児と重ねてみたり、育児についてそれぞれの気持ちを語り合ったり。もちろん人間なので常にとわくわけではありませんが、少なくともこの会に参加した後はいつともとても穏やかな気持ちになります。そしてこちらが穏やかな気持ちで接すると、必ず子供たちの態度も変わってきます。

もちろん育児もドイツでの生活も、まだまだ簡単に

いかないことありますが、悲観的な考えはなく、自分も子供たちもここケルンで友人や豊かな自然に囲まれた素晴らしい環境で子育てができています。それだけでもとても恵まれていると感じながら生活を送っています。

《読書》

村上 青香

ドイツに越してきて早一〇年、日本人の仲間も多く、住み心地の良いケルンのヴァイテンで、五才の男の子と〇才の女の子を育てています。月に一度、良子先生のお宅で開かれる読書会には、そんな私のような子育て真っ最中の日本人ママが集い、その日のテキストに基づいてそれぞれの意見やエピソードを話したり、時には良子先生から聖書のお話を伺ったりしています。またドイツ生活の情報交換や、日常の他愛もない話を皆でするのも毎回の楽しみです。その日のテーマについて皆それぞれに思いを巡らせたり、他の参加者の話を聞くことはとても興味深く有意義な時間ですが、私にとってはもうひとつ、何かを考えるきっかけを与えてもらう場でもあります。

いつだったか、話の流れで「何事にも感謝する」ということを良子先生がお話されました。キリスト教信者に限らず多くの人が口にするこの言葉、それまでも何度か耳にしたことがありました。

ひと口に「何事にも感謝」と言っても、人それぞれ様々な解釈が成り立つと思います。どんなに苦しい事も、過ぎてみればそこから必ず得るものがあり、それに感謝する事の大切さ。辛い時や苦しい時でも感謝を忘れず。

それまでの私は、この言葉をそんなふうにして受け取っていました。でも実際、苦境に立たされている時、そこに感謝を見出す余裕なんてあるかしら?感謝したところで現実問題その苦しみは無くなるのでしょうか?と疑問に思う心もありました。その日も、会場の場では、頭では分かるけど実感としてはよく分からない、まあでも感謝は良い事だから忘れないでこう、そんな気持ちでした。

ところがそれから何ヶ月も経った頃、いつものように、五才の息子に小さな事でイライラしていた時、ふと、新しい感覚が芽生えたのです。もし今、病气や仕事の都合や国の事情で家族がばらばらになつたと

